

特32

562

情事
村井靜馬著
明治太平記

九編

上

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官明記

東京

類國史
屬韓史
冊四十二
函六

記全

壽堂發兌

神功皇后三韓を征し豊太閤も韓地を伐し以降王師と
海外に臨みむかま這回臺灣の事件のみ原是孤島の
蕃族と雖も清國表裏の言を吐きて為し兵器を動
し於る輒々る大敵あり既に全權辦理大臣
詔を奉り支那へ渡海し至る迄本編の一段落と
し北京の大議論より遂に渠が償金を得る愛度凱
歌と諷ふの譯へ次の編に記載し總計十餘編を結局せし
と看官編者の慮漏れりば宜しく叱言りんを乞ふ

村井静馬誌

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官許
明

東京

類國史
屬碑史
冊四十二
函七

第〇四第

記
全

壽堂發兌

神功皇后三韓を征し豊太閤も韓地を伐し以降王師と
海外に臨み此の支那臺灣の事件のみ原是孤島の
蕃族と雖も清國表裏の言を吐きて為し兵器を動
し於る輒りざる大敵あり既に全權辦理大臣
詔を奉りて支那へ渡海し至る迄本編の一段落と
し北京の大議論より遂に渠が償金を得る愛度凱
歌と諷ふの譯へ次の編に記載し總計十餘編を結局せん
と看官編者の庶漏らば宜しく叱言らん支と請ふ

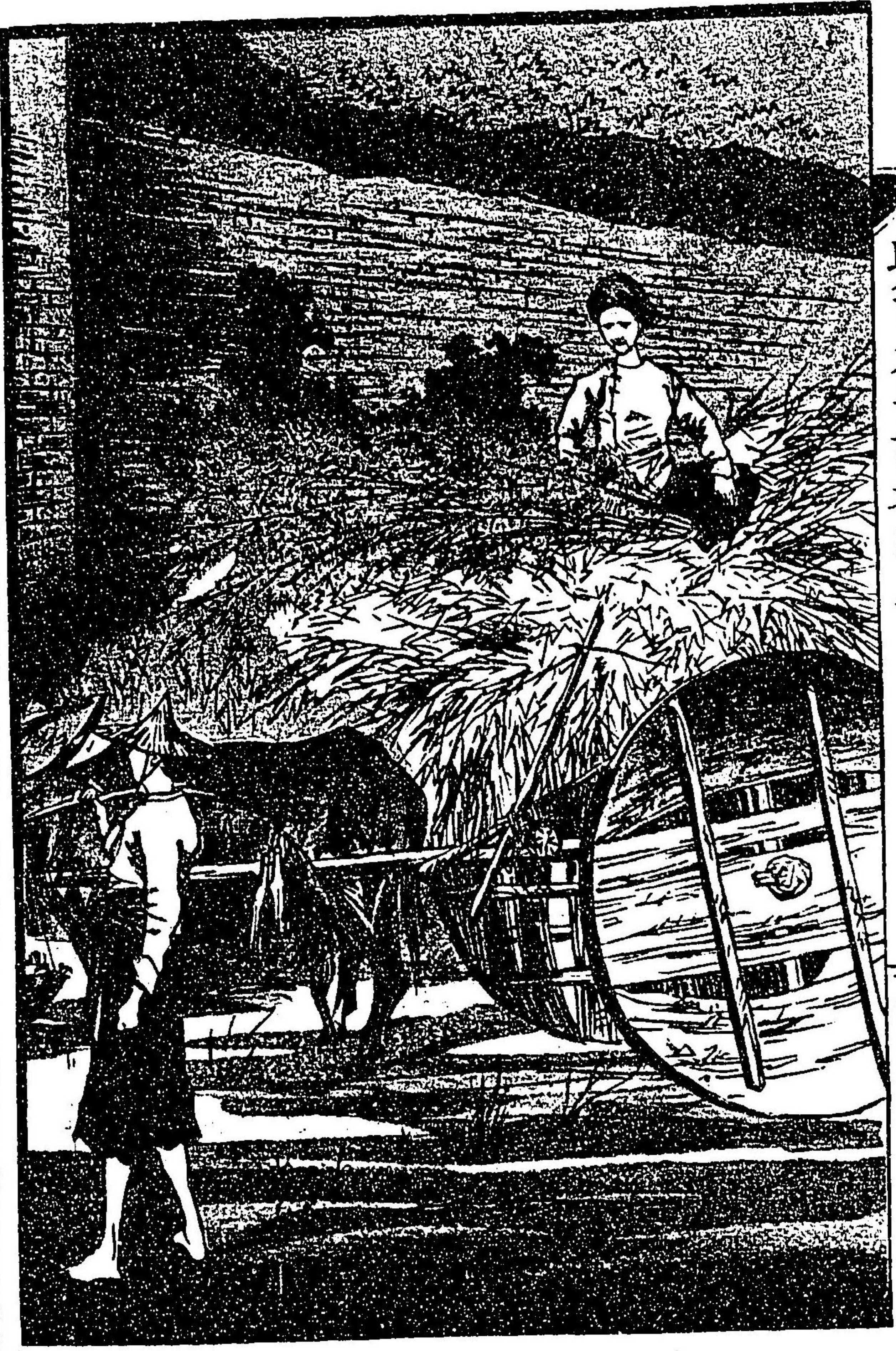
村井静馬誌

熟蕃薯
路頭
生業
る 圖

福安城



福安城



福安城



生蕃の山鹿
 間ふ魚
 鳥と
 る 図
 獵



卷之貳

石門ふ逼りー精兵一計の下は牡丹
 族狭撃ふー酋長とさ討取るふ
 始り三口の大軍奮發して蠻夷等が
 巢穴を獵るふ終る

卷之貳

將士等三谷を驅く遂は牡丹
 社は會合をまじり始り清國の議論
 紛紜たる故事の結落を定めんと
 大久保大臣支那へ渡らるる終る

明治太平記九編卷之一

東京 村井静馬著

再説薩州の徵募兵熊本の鎮臺兵等ハ牡丹族
 征せんとい險を凌ぎて進む程は彼石門の傍は土蕃等
 胸壁を築き設けて多人数茲は身と躰一たる首
 をうり顯ハ一と頻り砲を發したる彈丸雨の
 如くあるみぞ徵募兵等ハ夫と見く備ハ蠻賊彼所
 在り悉く誅戮する先度の怨は報えんと

俱ともふ砲ほう戦せんし及およぶと雖なほも這こ方まよりしと打うち玉たまをこゝろ
 胸むね壁かきし支さへられと渠なと傷きずつくる能あたはざるふ途みち嶮けん
 一ひとつ狭せまくれを逼せまりて力りき戦せん做あんとせば我われが
 兵へいと徒たし傷きずふ支しもゆりやせんと茲こゝより乍しばち一いつ策さくを
 設おけ鎮ちん臺たい兵へい一小いっせう隊たいへ山やまの裏うら手てふ兵へいをまへし牡丹ぼたん
 族ぞくが屯とんせし後のちろの山やまに攀よ登ぼり敵てきを直ち下かし見みるし
 小せう銃じゆう數すう發はつ放ほうち掛かれバ思おもひがけられ支しもある故ゆゑ
 土ど蕃ばん等ら大おほいふ駭おどく所ところへ豫よる憤いん懣まんし堪たえざりし

薩さつ州しゅうの徵ちゆう募ぼ兵へい等らハ先さに争あひ進すすみ来きりし彼かの胸むね壁かきし
 手てとくけし攀よ登ぼり且かつつ躍おどり起こへ何なにも直ちちし技わざ刀とうし
 慌あわ忙わいく野や蠻まん等らと相あてと撰せんし立たし争あひで敵てきを
 支しと得とべき或あるは胸むね伐はり幹かん竹ちく破はその餘よも手て痕あとを
 負おハぬる甚しくなくとも散さん々ざふ討うちたされ溪せき河が又またハ岩い壁かきの
 最さい嶮けんしきと飛と越こゆると宛さ然ぜん猿ざるの如ごとく命いのちを
 逃に行はきたり此時このとき土ど蕃ばんの首くびと得とる支し既すでし十二じふに級きゆうその
 中なかし牡丹ぼたん族ぞくの首くび長ちやうの首くび級きゆうゆりと案あん内ない者ものより告つげし

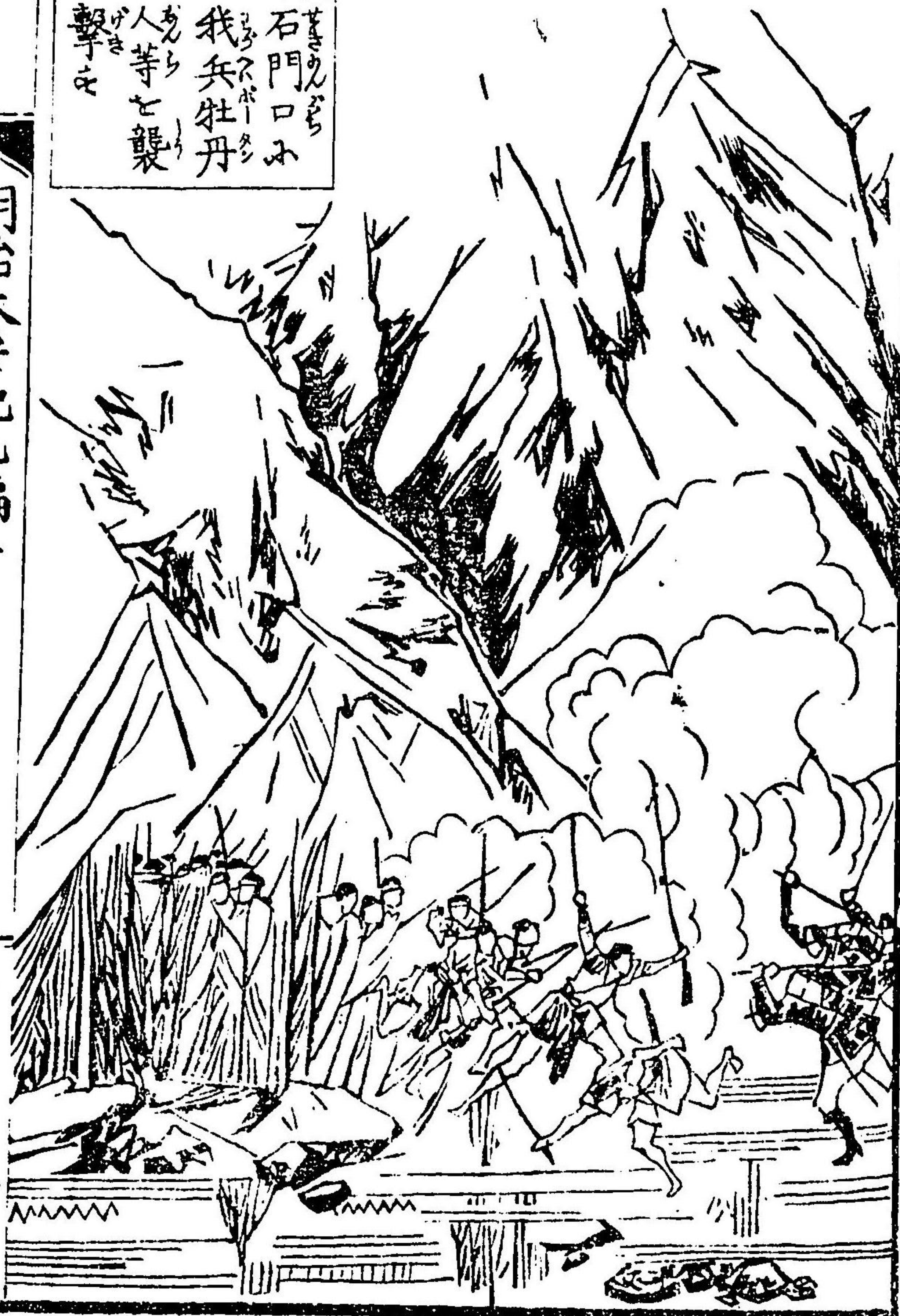
兵士等愉快の色を呈して稍凱陣を及びたり此日西郷
 都督もこの這回英國より購ふ所の鑄造船と高砂丸と
 号しつ則ちあまよ乗組る臺灣港より著帆りりしよ
 既よ我が兵牡丹族と戦争最中あり候りて兵士若
 干を上陸させし應援の用を備へ都督も尚船不
 在りし陸地の動静を窺ふれし此れに社寮の近
 海より支那國の軍艦二艘碇泊なりし居りし西
 郷の著船と見るより航する件の軍艦より四五人の士官

来りし都督も謁せん支を請ふ事最も頻りありし
 日次の日の十二時と約し面會不及びし處彼士官等
 の言へるやう卿も何等の故ありし頗る兵備を整
 へし此地の航海りりしと詰ると都督も所を
 去る辛未年明治以来我國の漂民を此島の土人等が
 暴殺し及べる事箇様々所の為ありし故よ去年全權
 大使を以て貴國の政府に談判せし臺灣東部の地
 於る支那の所轄しとある旨返答し及を

後来と誠めんぐ為問罪の師と向けたるありと事詳
 うふ演説せしむ彼の士官等ハ兼伏ましけん却ツる
 都督の航海せし勞を慰めまどしつ辞し我が船工
 飯りしが頓る件の支那船より我が日章の国旗
 向けし祝砲を發せし故這方より之ハ應トて報砲
 及びし小姑くわつる支那の二艦ハ此地を退帆
 とぞ此支果て西郷氏ハ附属の將士等侶俱し稍上
 陸し及をる彼の海岸ハ遠くぬ龜山と言へる地

選しこの這所ハ本營を設けし之を都督府と稱し
 余ハ此地の土蕃等ハ廿二日の戦争ハ彼石門を破ら
 ず牡丹の酋長を首を失ひしと聞くと日本勢の
 勇猛を甚ぶ恐愕したるは這回都督の大軍を率
 て入港したる為躰數門の大砲數挺の小銃鎗の穂
 先ハ宛然し秋の尾花の戦ぐ如き隊伍乱れ
 列を正し上陸し及びたる軍威四邊に輝き渡り
 目と駭るをたろりるを膽を消さる者もなく熟蕃の

石門口小
我兵牡丹
人等七襲
撃す



月台大飛已九編上

明治太平言方論上

徒ハ言入^{あひ}及^{あひ}な^{あひ}び^{あひ}生蕃族^{まむらじ}の其^{その}うち^{うち}も^も畏服^{おそ}あ^ある^る輩^{たぐひ}ハ
 社寮^{やしろ}の首長^{うちやう}「ニア」^なと頼^{たの}ま^まて我^{われ}が軍門^{ぐんもん}に降^{くだ}る^る者^{もの}日^ひを
 追^おて^お勘^{かん}く^くは^は是^{こゝ}に於^おて都督^{ととく}より参軍^{さんぐん}参謀^{さんぼう}等^らと列席^{りやくせき}
 して彼の降参^{かうさん}の首長^{うちやう}等^らを廳前^{ちやうぜん}に呼^よび^ひ出^だし^し形容^{けいよう}よ^よ武備^{ぶび}
 の嚴^{げん}ある^る成^{なり}示^しし^し辭^{ことば}よ^よ信義^{しんぎ}の厚^{あつ}き^きと演^まる^る是^{こゝ}非^ひの道理^{どうり}
 懇^{こゝろ}ろ^ろし^し諭^{こと}して惑^{まど}ひ^ひ成^{なり}覺^さま^まれ^れば何^{なん}と^とも感^{かん}涙^{なみだ}を拭^{ぬぐ}ひ^ひあ^あ
 る我^{われ}輩^{たぐひ}常^{じょう}に牡丹^{ぼたん}人^{にん}等^らが暴動^{ぼうどう}よ^よ苦^{くる}し^しむ^むと雖^{なほ}も訴^うふ^ふた^たき
 方^{かた}も^も又^{また}防^{ぼう}ぐん^{ぐん}も^もカ^か及^あな^なび^び何^{なん}と^との時^{とき}に此^{こゝ}患^{うれ}ひ^ひ成^{なり}遣^は

る事^{こと}のり^りと^と積^{せき}年^{ねん}艱^{えん}苦^くと忍^{しの}び^び居^ゐたる^るは神^{かみ}
 軍^{ぐん}此^{こゝ}島^{しま}よ航海^{かうかい}のり^りと渠^{みち}等^らと懲^{とが}して我^{われ}々^々が憂^{うれ}苦^くを救^{すく}
 ひ給^{たま}はる^るは實^{じつ}よ天助^{てんすけ}を得^えたる^るあ^あれ^れば不^ふ日^{にち}牡丹^{ぼたん}等^らの巢^{そう}穴^{けつ}
 御^{おん}討^{うち}入^いる^る在^あら^らず^ずと^と御嚮導^{おんきやうどう}仕^しら^らんと異^い口^{くち}同^{どう}音^{おん}よ願^{ねん}ひ
 出^いで^でる^る信實^{しんじつ}面^{めん}に現^{あら}われ^れと詐^{いつはり}り^りあ^あら^らず^ず見^みゆる^るも^も則^{すなは}ち^ち西^{せい}
 郷^{きやう}都^と督^{とく}より我^{われ}ら^ら刀劍^{とうけん}或^{ある}は小銃^{せうじゆう}又^{また}は緋縮^{ひしゆく}緬^{めん}の類^{るい}い^いま^まど
 咸^{みな}と^とく^くよ^よ之^{これ}と與^あへ^へと慰^{なぐさ}情^{じやう}と表^{あらわ}せ^せる^ると^とく^く渠^{みち}等^らの
 り^りと^と好^{こう}意^いと感^{かん}ト^とて牛^{ぎゅう}肉^{にく}或^{ある}は鷄^{けい}ま^まと思^{おも}ひ^ひく^くの土^と産^{さん}と

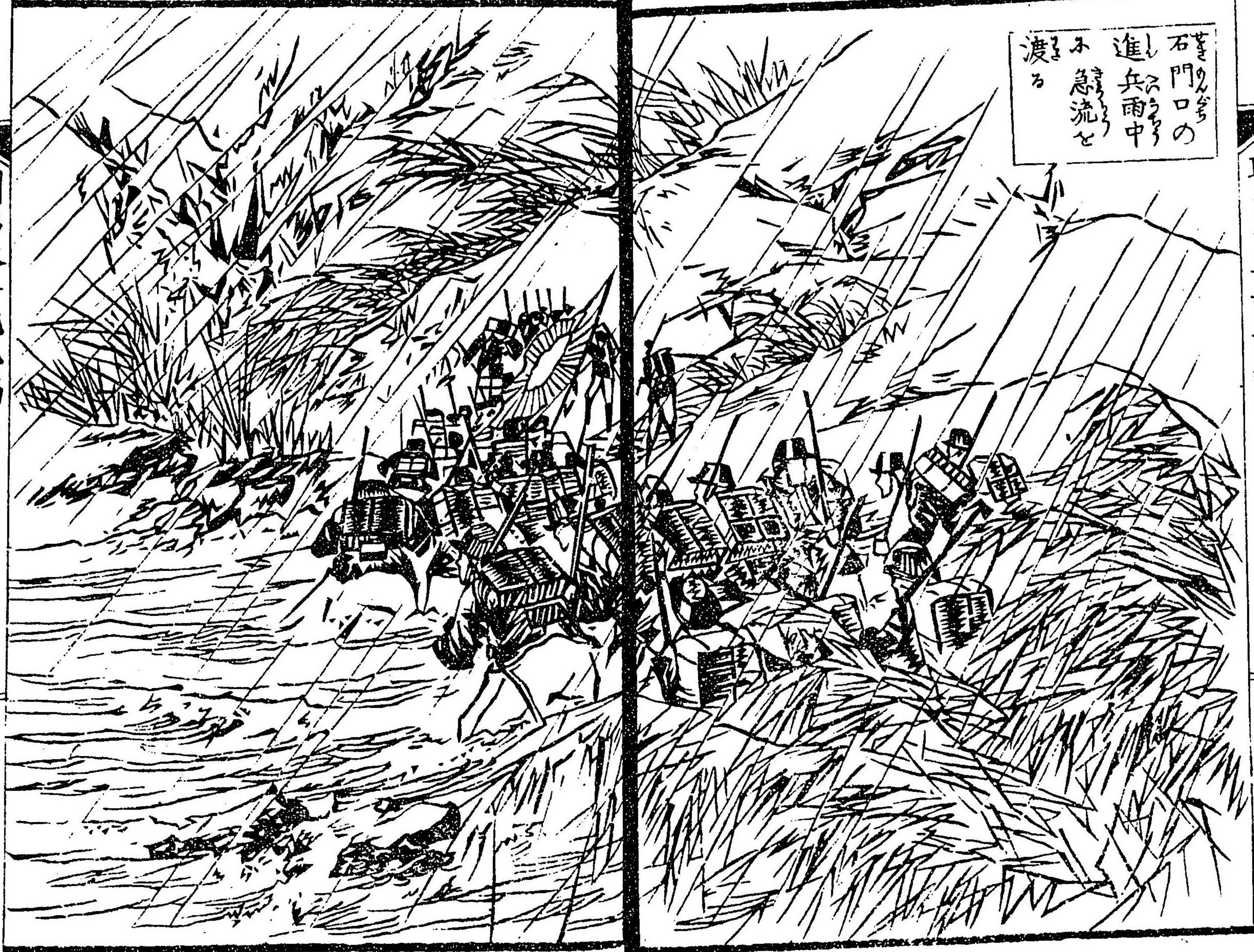
呈下て應意多し躰と表はせり斯の如く山土蕃等の
 畏服する者多しと雖も牡丹の社族等の廿二日の大敗
 めも懲む尚抗まざる機会あり其他山深き野蛮等の
 降伏せざる族もあまざる速く賊完復襲ひ其成功後
 奏せんと兵士等頗りよ促まざる則ち都督府よ
 あつて種々談判よ及なれし何れも一々頷
 固ふる彼の野蛮等を處置せんよ一回兵威後
 示まよゆるむむ説諭の届くを待たふりしねを大

擧し山谷を獵り征まざるはあまると伐し救ふまき
 を撫助まざるしとと彼の酋長の中よ於て心利たる
 者と召く向ふ所の地理方角を豫め聞亂し来る六月
 一日と期しと進撃よ及ぶべしとて總勢三千余人の
 内十九大隊三小隊を残して本營を守らるゝ其の兵を
 三手よ分ち一手は石門口より進み一手は風港口より攻め
 入り一手は竹社口より襲ふと三方の兵遂に合一牡丹
 社へ押詰めべきの軍議決定し及びし其手配り後

なま程なまは既すでに五月ごがつの末すえより一日いちにち毎ごとに霖雨りんう降ふり續つづまて
 更さらに晴間はれまの頃ころより別わかく六月ろくがつ一日いちにちより篠しの々々如ごとき大雨たいう
 あれども此日このひを以もつて進軍しんぐんと豫よて期ごしむる事あり故ゆゑ諸しよ
 口の兵士等へいしら猶豫うゐする体ていなく就中あんぐ石門せきもん口ぐちへ都督ととく自ら
 向むかふとらるる事を徵募めいぼ兵へい二小隊にせうたい十九大隊じゅうくわだたい一小隊いせうたい海軍かいぐんの
 兵へい五十人ごじゅうにん大砲たいぱう數門すうもんと歩卒ふそより曳ひくを佐久間さくま中佐ちゆうさ等らと
 と指揮ししむる彼かのの酋長しゆぢやう等らと嚮導きやうどう者しやとなし先隊せんたいと号ごう
 して進發しんぱつせし素もとより嶮岨けんじんの道みちあるの事ことを途中とちゆうに幾筋いくしん

る川がはのりりりりと常とこに流ながれしゆりぬも大雨たいうの為ために
 水漲みづあがりて甚たまに渉わたる事に悩なやむ事に第二だいにの川がはに至いたりて底そこ
 の石いしをも轉まむる事に最もとも急流きゅうりゅうある故ゆゑに衆兵しゆへいあつて手て
 と引合ひきあふ事に早瀬はやせと渡り越わたきんとする時とき鎮臺兵ちんたいへいの歩卒ふそ
 一人ひとり過あつて轉まびらが之これを救すくふ事に忽たちちま溺死びやくしせり
 斯かくの如ごとく急流きゅうりゅうと尚なほ二に程ほどうち越こへて四重溪庄しじゆうせいじやうと
 る地ちは漸やくやくや着陣ちやくぢんせし直ただちま斥候しやくこうを遣つは
 して其近傍そのきんぱうを探索たんさくせし敵てきと覺おぼしむ者ものも見みへざ

石門口の
進兵雨中
不急流を
渡る



左右まらうら日も暮たれば當所の民家は宿陣しつ諸
 次の日の早天より徴募兵と先鋒として既石門まぐ攻
 寄これど三日の敗れ懲らん這所をも支ゆる敵のつと採ハ
 尚も山路よ分入る程よ或ハ幾々たる断岸つら又ハ高草
 生茂りく何れ戎道路と定めがたと辛うとて辿りつ稍
 大埔角とつるよ到り是より牡丹の巢穴までハ一里をう
 の程とつとば衆兵その身の勞を忘とて頻りハ嶮路を進
 行きハ半途よ大木と伐仆して小徑の通路と塞ぎハ

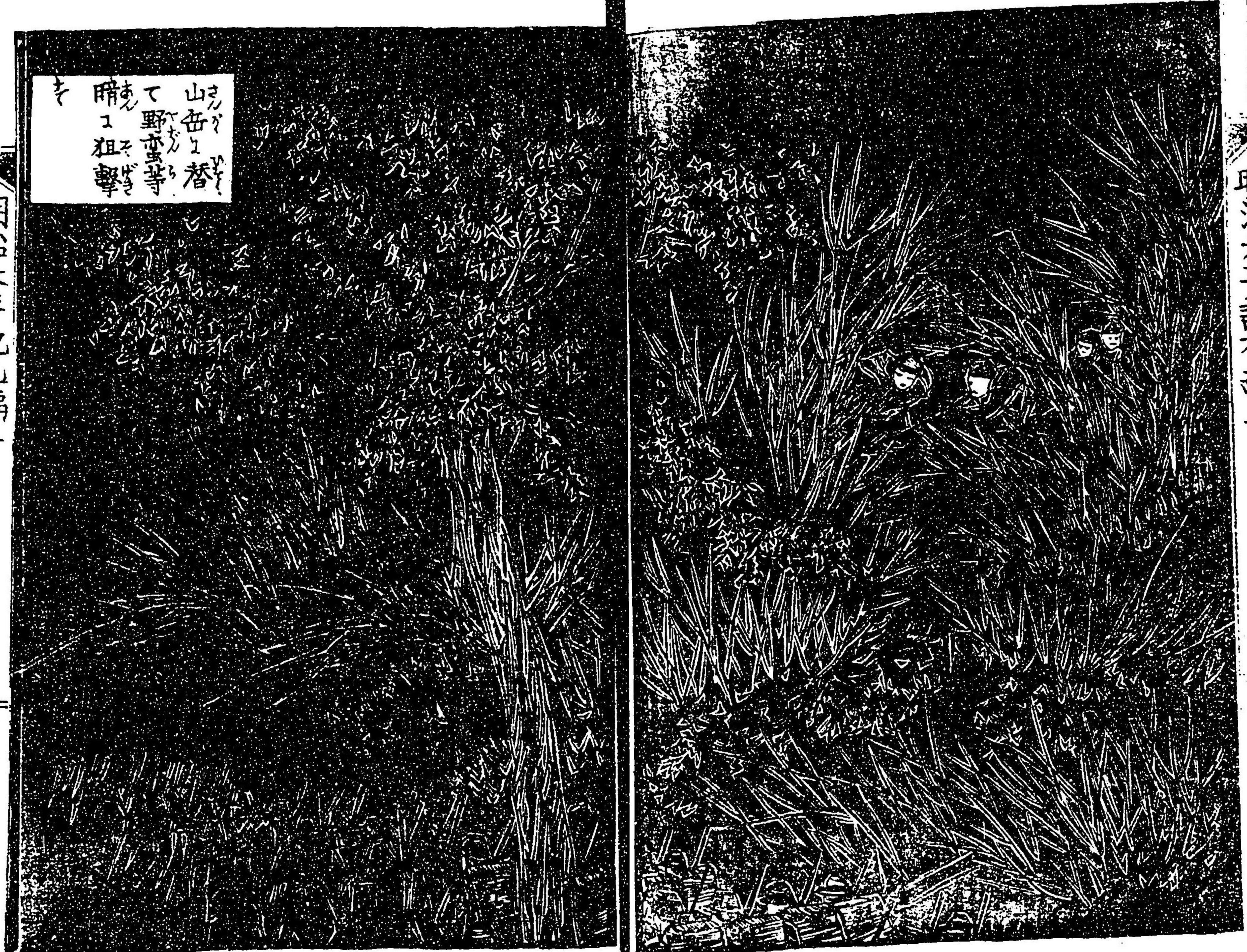
うぐ輒く進む支と得ず兵士等大のハ焦燥と帶劔と
 抜く伐り拂ひ取除けんとまるらふ何時の程ふ日ハ
 暮たせば是非なく傍の樹間よ據てあつて野陣と布
 けらガ升ガ中よ徴募兵のハ彼大木と伐除けたる此の
 虚間より潜り抜けく直ちハ牡丹社よ攻入りハ村中
 家數十餘戸のほとも土蕃等ハハ逃去りて人影さ人も
 見へざれば甚ハ望み後失ひく思ふも似ぬ奴原も
 と舌打されど詮るさふ升処よ宿陣も程よ夜明く

自餘の兵隊も彼大木と取除けく漸々進と来れば
 又西郷都督も後軍の兵と率へて此地より出陣せし
 是より敵一人も出會わば勞して功あは心地せし
 又酋長等と召出して尚此外は牡丹の棲やると尋
 めるは是より後の山腹と南の方ある溪間よ棲と設け
 一者われども其道極めく嶮ありと言ふ後兵士等
 听りて先や其地より向へんとて徵募兵二分隊の案
 内者先より立て彼の山腹へと進む程より高く茂りし

草の中よ躲と伏したる蕃族より突然とて砲發せし
 る二個の士卒残と負へり夫と見るより徵募兵等
 へや賊とて出會ふたれと彼草中へ筒と向けく乱
 射するに雨の如く或ハ刀と拔持て茂りし中へかけ
 入りて四邊隈より獵れどもや何地へ逃去りて其形
 見え見留めば兵士等より憤怒よ堪む尚も道あり
 岩間と傳ひく頻り進と行く程よ果しと蛮夷の
 棲と覚しき三四十戸の小家より片端より火弦

放ち焼拂へども抗ふ者多く其迹傍まで探索せられど
 絶る人氣も見へざれば詮術尽るまじくと元の陣所
 へ立飯より又南方の溪間へ十九大隊一分隊襲撃よ
 及びみ茲ゆも此の家屋の何とど咸逃去り一躰ふる
 故放火みる退けり夫へ収置き風港口へ谷参軍を
 大将として同日本宮を進發し風港とる地ふ至り
 此風港へ熟蕃よく其夜の茲ふ宿陣し次の日の早天よ
 響み降伏させあり又彼の薩州の徴募兵と先鋒として真先を進め谷

氏より鎮臺兵の内二小队を引卒せりと漸次よ
 山間よ分入るふ嶮岨をぐる所もよく殊更敷り所の
 急流の行く先々も横たわりと深き二尺ふ餘るも
 舟を之と渡るも輒りぬ或の嶺よ攀登り或ハ谷
 よ下りみどりと往く夏凡五六里許り遙うふ人家の連
 るるゆり這ハ爾乃社と号し牡丹族ふ劣らざる暴戻
 の者あるより坂案内者より報告し先隊の兵士
 等大の勇氣よく頓く件の一村落へ襲ひ蒐らんと



山岳之替
野蠻等
暗祖擊

まる折まりり忽とち傍かたの山腹やまはらより小銃こじゆ數發かずはつ打掛うちからま
 あとが為ためは案内者あんないしやと小卒せうそつ一個いっぺい癩かと負かふみぞ儲たくわを
 那所そこは伏兵ふくへいありと此方こゝも透すさば砲ひょう發はつし直ただちよ
 是等これらの趣おもき後軍ごぐんへ報知ほうちませしうぶ谷少將やふせうしやうみも差さ
 置おくせ一小隊いっせうたいと山手やまてふ廻まし敵たきの後のちは籠かご裏うらはま
 を徵募めいぼ兵等へいとういましく烈はげしく頻しばしばりよ砲ひょうを打掛うちかる々々
 彼の村落そこのむらへ乱入らんにゅうせしふ僅わずかうふ一個いっぺいの蕃族ばんぞくを打仆うちたし
 たちのまふしと其餘そのほかを何処どこへ逃失にげしせしう岩壁いわかき茂林もうりんの

多おほくれば遂ついには其行そのゆきく所ところを知らず左右さうぶあるうち谷少やふせう
 將しやうみも後軍ごぐんを引ひき進すすみ来きれば又また彼の山手やまてへ廻ませし
 兵へいも手て後空ごくうしくあそ来きるみそ此夜このよは茲ここの民家たみかに宿しゆく
 しと倘野蠻等たがやまらんとうが夜よに乘のりし襲おそへる度ほどありしと堅か
 固かく備そなへを設たけしと夫等それらの度ほどもなかりしと夜よ
 明あり人家たにがに火ひを放なち悉ことごとく焼拂やけどひる頓たて其地そのちを發あり足あ
 白しろ牡丹ぼたんの方かたへと進すすみし途中ちゆうちゆうに老女らうにょと少女せうにょとが後あと
 得よひ居ゐたるを見付みたり老女らうにょは疾はやくを逃去にげりしと少女せうにょは

更さらも逃にげもせむせむ忙然いそがしと一ひと居ゐたり一ひと兵士等捕とらへ
 本營ほんえいより送り尚蕃族しやうばんぞくの棲すまやゆると道みちをぐる探たん索さくされど
 敵てき一人ひとりめを出い會あひて遂ついに牡丹社ぼたんしゃに至いたり一ひととを念おぼれはま
 竹社たけしゃ口ぐちへより吉田海軍よしかたかいぐんの大尉だいう篠崎指揮長しやしきしちやう等の面々めんめん
 徵募兵等ちやうぼへいとうを引率ひんそつし之これと此手このての先鋒せんぽうと一ひと軍ぐんを
 福島参謀鎮基兵等ふくしまさんぼうちんきへいとうの隊たいを率ひ後軍ごぐんハ大將だうしやう赤松参謀あかまつさんぼう
 軍近衛士官信号士官等ぐんちかゑしおんしんごうしおんしんごう是彼附属の兵士を徒ただへ自
 餘よの二年ふたごより一日後いちにちごとて六月二日ろくがつににちより本營ほんえいを發はつし又一また一方いつぱう

の峻路せんろより分入ぶんいり左右さうぶより彼石門の坂上かのせきもんのかみより到いたり一ひとが
 此手このての竹社たけしゃ高士猾たかしわづの両社りやうしゃを襲おそひ一ひと其上そのうへより牡丹ぼたん
 へ寄よするの軍配ぐんぱいなれば頃まて案内者あんないしやを召めして件くだの両
 社しゃへ攻せ蒐くる便路びんろ奈何いかんと尋たづねれば嚮導者きやうどうしや等らハ指さ
 きしと左ひだりの山やまより寄よるものハ竹社たけしゃ等らが棲すまりて右みぎ
 ある山やまを一ひとツ隔へり又東またある山腹さんぶくより彼の高士猾たかしわづの
 巢穴そうけつより其方角そのまがくに差示さしせば然さらゆらば手近てちかき竹
 社しゃと撃うち然さら一ひと高士猾たかしわづを襲おそへんとて左ひだりの方ほうへ兵へいを

向け難所を凌ぎて往く程は果一と些の人家の所
 と咸逃去りたる人影あり此時遙く砲声の山は響
 き聞く聞へる一とる備の石門口の兵をたや牡丹社を攻
 入り砲撃をまじと覚へる此手も劣らば攻寄せん
 と彼の指揮長たる篠崎を徵募兵等が激し
 真先へ進む程は是より先へ殊更峻しく辞は
 演も盡されざりしと往方より岩壁聳へ立ちて宛然
 路の絶たるが如く余とて爰まで辿り来と引返す



先隊進ぶ絶
険に至る

山ノ本三言ノ終

一

だたやうもな—と先隊の兵士等憤發—と彼の絶
 壁を登る夏九十丈をうりふ—と僅ふ平地に至り—
 ぶ夫より道より路を索めて行く。幾許里あるべく
 所々よ小村ゆりと雖も逃て出會者もゆらねが尚ま—
 兵と進む程よ茲よ一條の流れゆり最も早瀬あり—
 うど難所よ慣と—夏るとば衆—の—踏込—
 渡り越さんとよる折—も忽ち二人の敵ゆり我と窺
 へ人跡あると兵士等速くも見出—と蕃族彼所よ見へ

たるぞ疾く打取とと言ふよりちやくあめく筒と差
 向け—ゆりき—砲發せざる間小賊徒等直ち身と轉へ
 して山手破き—て逃行き—其終見へどあり—
 馳—諸方へ斥候と出—と頻り小穿鑿よま程よ土
 蕃等路傍の草叢の最も深き茂—小躲れく斥候
 の兵の近く来るを狙ひまぬ—と砲撃せ—と忽ち二個ハ
 打殺され—個ハ—と瘡を負へ此形勢を見るよりも
 指揮長篠崎大ゆ怒りと兵士命—て抜刀なき—め

彼草中分入らせく隈まぐ之と獵ると雖も渠等ハ
 何とみ走りしや逃足甚ど疾くしと其影と見留め
 緋々篠崎まぐく焦燥と劇しく衆は指揮し山手の
 方へと攻登り爰み至りて蕃族等がまゝ出會ふや
 否やの譯へ次の巻よ委しく解くべし

明治太平記九編卷之一終

